

<干支(えと)>について

十干 : (甲(こう)・乙(おつ)・丙(へい)・丁(てい)・戊(ぼ)・己(き)・庚(こう)・辛(しん)・壬(じん)・癸(き))
 十二支 : (子(し)・丑(ちゆう)・寅(いん)・卯(ぼう)・辰(しん)・巳(し)・午(ご)・未(み)・申(しん)・酉(ゆう)・戌(じゆう)・亥(がい))

ここで十干に陰陽五行説が結びつく
 →陰陽(兄(え)・弟(て))五行(木(もく)・火(か)・土(ど)・金(こん)・水(すい))

木(き): 兄(え)→甲(きのえ) 弟(て)→乙(きのて)
 火(か): 兄(え)→丙(かのえ) 弟(て)→丁(かのて)
 土(ち): 兄(え)→戊(ちのえ) 弟(て)→己(ちのて)
 金(かね): 兄(え)→庚(かねのえ) 弟(て)→辛(かねのて)
 水(みづ): 兄(え)→壬(みづのえ) 弟(て)→癸(みづのて)

これを十二支と組み合わせて60通りでえと巡り(還暦)となる。

<六十干支表>

1	きのえね 甲子	2	きのとうし 乙丑	3	ひのえとら 丙寅	4	ひのとう 丁卯	5	つちのえたつ 戊辰	6	つちのとみ 己巳	7	かのえうま 庚午	8	かのとひつじ 辛未	9	みずのえさる 壬申	10	みずのととり 癸酉
11	きのえいぬ 甲戌	12	きのとい 乙亥	13	ひのえね 丙子	14	ひのとうし 丁丑	15	つちのえとら 戊寅	16	つちのとう 己卯	17	かのえたつ 庚辰	18	かのとみ 辛巳	19	みずのえうま 壬午	20	みずのとひつじ 癸未
21	きのえさる 甲申	22	きのととり 乙酉	23	ひのえいぬ 丙戌	24	ひのとい 丁亥	25	つちのえね 戊子	26	つちのとうし 己丑	27	かのえとら 庚寅	28	かのと 辛卯	29	みずのえたつ 壬辰	30	みずのとみ 癸巳
31	きのえうま 甲午	32	きのとひつじ 乙未	33	ひのえさる 丙申	34	ひのととり 丁酉	35	つちのえいぬ 戊戌	36	つちのとい 己亥	37	かのえね 庚子	38	かのと 辛丑	39	みずのえとら 壬寅	40	みずのとう 癸卯
41	きのえたつ 甲辰	42	きのとみ 乙巳	43	ひのえうま 丙午	44	ひのとひつじ 丁未	45	つちのえさる 戊申	46	つちのととり 己酉	47	かのえいぬ 庚戌	48	かのと 辛亥	49	みずのえね 壬子	50	みずのとうし 癸丑
51	きのえとら 甲寅	52	きのとう 乙卯	53	ひのえたつ 丙辰	54	ひのとみ 丁巳	55	つちのえうま 戊午	56	つちのとひつじ 己未	57	かのえさる 庚申	58	かのととり 辛酉	59	みずのえいぬ 壬戌	60	みずのとい 癸亥

<庚申講とは>

- ・もともと中国は道教の「守庚申」が由来の民間信仰。日本では奈良時代の文献にも登場し、練馬区では調査時にも数件が確認されているほど息が長い。区内の遺物は約120。
- ・「人間の中に潜伏している三尸(さんし)虫と称する靈物が、庚申の夜の睡眠中に身体から抜け出して天に昇り、天帝にその罪を告げて寿命を縮める」との言い伝えが、庚申の晩には眠らずに三尸を身体から出さなければ寿命が延びると信じられた。しかし守庚申は、一夜を眠らずに徹夜する意外に何の宗教儀式もないため、退屈しのぎに歌舞や酒宴を行うのが常となり、平安の宮中から室町から江戸と庶民に広がるにつれ、守庚申を口実に酒宴に興る一夜の趣となった。
- ・しかし室町の末より、各種神仏を庚申に拝する習慣も加わり、結衆の証として庚申供養塔や板碑が造立されるようになり現在に至る。(神仏供物は様々・本末転倒の妙がある)

<参考図書>

- 「庚申塔__練馬の民間信仰の中から__」(練馬区教育委員会1973)
- 「暦の雑学事典」吉岡安之(日本実業出版社 1999)